
PLAY LOVE

久住 なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PLAY LOVE

【Nコード】

N5622A

【作者名】

久住 なつき

【あらすじ】

暇つぶしに出来た企画のルールは複雑なようで簡単。惚れたら負けで、惚れさせたら勝ち。

一、たいくつ

福田まほこは片手にケータイを弄りながら、家に向かって歩いていった。ケータイを弄る目的は特になく、何となく画像を見たり、メールを読み返したりしている。決してその行為が楽しい訳ではなく、単なる暇つぶしだ。

(あー。暇)

待ち受けの画像でも変えようかと色々見ていると、画面がメール受信中に変わった。定額制ではないので、まほこは急いで通信を切る。(誰だろう?) そう思いながら受信のフォルダを開く。

「受信 青田 芯」

青田芯。何でか良く分からないけど高一から結構仲が良い男子。今は高二の五月だからもう一年以上の付き合いだ。青田との関係を言葉にしたら「悪友」が一番当たっていると思う。青田は顔や雰囲気は格好良いのだが馬鹿だ。大した事じゃないだろうと思いつつながらボタンを押す。

「暇だろう?」

青田らしい遠慮のない文書だ。

「は?」

それだけ打って、送信する。二分も経たない内に返事が来た。

「今、元木と坂下といんだけど、俺達も暇なんだよな〜」

元木拓也と坂下亮。青田とよく一緒にいる男子で、クラスを不良と好青年の二つに分けたら間違いなく不良の分類に入るような奴ら。もちろんそんな二人とつるんでいる青田も不良組だ。まほこ自身もそうなので、それは別に気にならない。

見た目は格好良いし、坂下なんかは結構まほこの好みのタイプに当てはまる。しかし、二人ともプレイボーイで有名だ。

受信したメールを読みながら歩いていると家についた。一旦ケータイを閉じて鞆にしまう。インターホンを押すと母親がドアを開けてくれた。「ただいま」「おかえり」とだけ言葉を交わすとまほこは自分の部屋に向かった。

メールの返事をするか、先に制服から着替えるか少し迷った末、ケータイを弄る。

「ふうん。それで？」

暇なら勉強しろよ、と思った。元木と坂下はまあまああの成績だけど、青田は相当酷い。まほこ自身は平均を少し超える程度。成績が悪いと親が色々うるさくなって面倒くさい。平均を超えている今は多少帰りが遅くなっても何も言われないので楽だ。

着替え終わらない内にまたケータイが鳴る。通信だけ切って、メールは読まずに着替えを済ませる。今日は土曜日で午前授業だった。もしかしたらこれから出掛けるかもしれないので、ジーンズを履き、お洒落なTシャツに軽いパーカーを羽織った。ケータイを開く。

「なあなあ。面白い企画あんだけど、参加しねえ？」

面白い企画。あの三人が集まって出来た企画。一般的に見て下らない企画だと言うことは間違いないだろう。関わるだけ時間の無駄な

ような事かもしれない。

）・・・だけど（

「良いよ。詳しい事教えて」

何となく退屈な日常。その中で与えられた暇つぶし。それを断る訳がない。

二、企画

青田から返ってきたメールに書かれていた用件は二つ。一つは詳しい事は明日、学校から一番い駅の傍のファミレスで話すという事。もう一つは、まほこ以外に企画に参加しそうな女子を一人連れて来いとこの事。まほこは仲西美華にメールした。美華は学校で何となく一緒に集まっている子の一人。見た目はチャラチャラしていて、中身もまほこの知る限りチャラチャラしている。中年の人が嫌味で使う「最近の女子高生」という言葉がぴったりな子だ。

美華とはたまに遊びに行ったりするけど、友達とは違うと思う。もし美華がいじめに遭ったら、まほこは美華との繋がりを切るし、逆の立場だったら美華もそうするだろう。そんな薄い関係。美華に限らず、ほとんどの子との関係がそうだ。まほこはこの浅く広い交友関係が自分には合っていると思っっている。

美華の返事はOK。今、二人でファミレスに向かって歩いている。約束の一時を少し過ぎたが走ろうとは思わない。

特に意味のない会話を続けながら、ファミレスについた。奥の方にある広めの席に青田と元木と坂下が座っているのが見える。空になった皿や半分くらいしか残っていないコップがテーブルに乗っている。男子の集合時間は一時間以上早かったようだ。元木が二人に気がついて手を振った。女子の中で噂になっている魅惑の笑顔で。確かに格好良い。

まほこと美華は三人の元へ歩いた。まほこは青田の隣に座り、美華はまほこの隣に座る。元木の隣も空いていたのだが、まほこは青田以外の二人とあまり話した事がない。美華は、以外と人見知りな所があるので少し大人しくなっている。そんな雰囲気察して、元木が口を開く。

「よっ、福田、仲西。俺達これからまた料理頼むんだけど、二人は

どうする?」

「お昼食べてないし、何か食べる。美華もお昼まだだよね?」

「うん。あたしもお腹空いたあ」

元木がメニューを差し出す。まほこは元木の気遣いの良さに感心しながらメニューを開く。

スパゲッティも美味しそうだし、ミラノ風ドリアも捨てがたい。美華を横目で見ると、少し緊張のようでも無言でメニューを見ている。まほこは正面に座っている坂下に聞いてみた。

「ねえ、坂下は何にしたの?」

「俺?さっきはピザで、これからパフェ頼むぜ」

見た目が少し体育系っぽい坂下からパフェという単語が出てきたのは以外だった。もし緊張してなかったら、美華は爆笑しているだろう。

結局まほこはドリアを頼んで、あとの四人もそれぞれ好きなものを注文した。料理はすぐに来て、半分くらい食べると、この五人でいる雰囲気にも慣れてきた。

「それで、今回の企画なんだけど」

青田が一旦食べるのをやめ、フォークを皿に置く。まほこ達もそれに従って食べるのを中断する。ファミレスに入ってから三十分以上は経っていた。ようやく本題の始まりだ。

「参加者は俺と元木と坂下。それに福田と仲西。あと、その他に五

人
」

最後の言葉にまほこと美華は訝しげな表情になる。

「あー。まあ、簡単に言えば、恋の遊び。みたいなもん？」

恋の遊び。この企画によって何かが変わる事に、皆気づいていたんだと思う。

三、ルール

「は？恋の遊び？」

「そ。惚れたら負け。惚れさせたら勝ち。簡単だろ？」

二カツと笑う。簡単なのはきつと、青田の頭だと思う。

まほこと美華は青田から目を離し、元木と坂下を見る。二人の表情は一緒。きつと言いたい事も一緒。

(お前らも馬鹿なのか?)

坂下と元木が口を開く。

「まあ、簡単に言えば青田が言った通りだ」

「坂下、俺がルール説明するよ。まず1、予定期間は一ヶ月。2、残りの五人はゲストとする。ゲストには企画の事を話してはいけない。3、ゲストでない場合は告白を受けた時点で勝ちとする。4、ゲストの場合は告白を受けた、または告白してOKをもらうと勝ち。5、ゲストでない相手には、それぞれに対し一回だけフェイントの告白が出来る。フェイント告白の時は証拠になるように誰かにメールでそれを伝えておく」

「ちょっと待って。3と5って矛盾しない？」

「告白を受けて自分も惚れたと思ったら、返事の変わりに告白仕返す。もしフェイントだったら、その時点で負け。本当だったらカツブル成立。ただし二人とも負けな。告白の返事として、フェイント

告白をする事は出来ない。どう？」

「うーん。何となく分かった」

簡潔に言つと、かけひきを駆使して、相手を惚れさせれば良いらしい。

「でも、何の意味があるわけ？」

美華が最もな事を言った。

「特に意味はないよ。だって暇つぶしの企画じゃん？負けた奴には何か罰ゲームさせるつもりだけど。敢えていうならプライドのために」

元木は言い終えると、食事を再開し始めた。青田と坂下もそれに続く。

まほこと美華はお互いに顔を合わせて、この企画に本当に参加しても良いものか、考える。

しかし、まほこの答えはもう決まっていた。

「で、参加すんの？」

「もちろん」

「あたしも。面白そうだし」

まほこと美華の参加が決定した。

あとはゲストとなる五人だ。ゲストには企画の内容を説明する必要があるないので勝手に決める事が出来る。ただし、皆が知っている人と

いう条件だ。同じ学校の人なら誰でも良いという事になる。

女子で名前が挙げられてのは、相川夏妃、高澤沙衣、河本友希。夏妃はクラスの中心にいる正統派人気者だ。不良なまほこと美華とはあまり縁がない。元木が夏妃の名前を挙げた時に、少しだけイラツとしたのは秘密。友希の名前を言ったのも元木だ。友希は女子のまほこから見ても可愛い。天然な子はあまり好きではないけど、友希はそういう所も良さだと思う。不良じゃないのに、まほこ達とも仲良くしてくれている。そして沙衣の名前を挙げたのは青田。沙衣は男嫌いで、滅多に男子と話さない。更に美人なので男子の間でハドルが高いと言われている子。

「何か、この三人とあたしって、勝負にならない気がするんだけど」

美華が最もな事を言った。しかし戦う相手が違う。

男子はまほこと美華が一人づつ挙げる事にした。美華が挙げたのは片瀬准一。女子の人気者が夏妃なら、男子は片瀬。もちろん格好良いし、元木や坂下と違ってさわやかだ。まほこは誰にしようか迷った。一種の告白大会みたいだ。

「・・・沖田慶」

「あー。沖田ね。良い奴だよな」

沖田は優等生なのに、冗談も言えて、がり勉でもなく、めっちゃめっちゃ格好良い。不良の元木達も沖田を認めている。これで参加者、ゲスト含めて全員同じクラスだ。

「企画スタートは来週からな。ルールは守れよ」

企画が始まる前にすでに敗者がいる事は、秘密。

四、裏事情

まほこと美華が帰った後、青田は元木から一発殴られた。

殴られた理由が分からず元木を睨むが、坂下の呆れた視線は元木ではなく青田に向けられていた。

「お前、馬鹿じゃねえの？何で高澤の名前を挙げんの」

「は？」

元木が言っているのはゲストとなる女子を決めた時の事。

相変わらす訳が分からないといった青田に今度は坂下が頭を軽く殴る。

「馬鹿野郎。お前は福田が好きなんだろ。他の女子の名前言ってどうすんだ」

そもそもこの企画が出来たのは青田のまほこへの片思いからだ。高一の頃からまほこに片思いをしている青田。元木と坂下は事あるごとに青田から相談を受けていた。割と真剣にアドバイスなどしていたつもりだが、状況は一年前から全く変わっていない。原因の一つとして、まほこが色恋沙汰にあまり興味がないという事がある。

そこで元木が考えたのが今回の企画。

もちろん青田のためだけにするわけじゃない。元木は周りからも有名なプレイボーイで、本人もそれは認めている。相手を惚れさせたから勝ちの企画、元木自身も楽しめる。

この企画を二人に話した時、青田はすぐに食い付いて来た。ただ、まほこには手を出すなど言われたがそれではつまらないので、元木は自慢の饒舌を活かしうまく丸め込んだ。

坂下はあまり乗り気ではなかったものの、結局参加している。それに、本人は否定しているが坂下も元木に負けなくらいプレイヤーイだと言われているから、結構この企画は楽しいだろう。

そんな裏事情にも関わらず、青田はまほこ本人の前で沙衣の名前を挙げた。

「だってさ、高澤とまほこってタイプ似てねえ？冷たい所とか、美人なことか。間接的に、まほこが好みって事伝わるかもしんねえじゃん！」

「女子はそういうの嬉しくねえの。しかも福田と高澤は別だろ」

元木は失敗に全く気づいていない青田をもう一度叩きたくなった。

「それよりもよ、俺は福田が沖田の名前を挙げた事の方が問題だと思っぜ」

坂下が口を開いた。

沖田と言えば、がり勉でもないのに成績が良くて、話しも面白くて誰にでも優しい、正に好青年だ。青田や元木達とは似ても似つかない。

「もし福田のタイプがああいう奴なら、可能性ないんじゃないか？」

「・・・確かに？俺達とは間逆のタイプだからなー沖田は」

元木はまほこが沖田と言った時に少しだけイラッとした。別に沖田が嫌いな訳ではないのに。

「でもさ、でもさ。まほこも不良じゃん？沖田とは合わないってか、そうじゃなきゃ俺泣くよ？」

内心相当のショックを受けた様子の子の青田。確かに片想いしている子のタイプが自分と間逆だったら、辛いものがあるだろう。

「っーか、タイプとかの前に青田はもっとしつかりした方がいいんじゃないかねえか？」

「無理っしょ？青田だし」

「・・・泣くよ？」

企画の隠された裏事情。そして裏には裏がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5622a/>

PLAY LOVE

2010年10月21日23時20分発行